

エリートの行為と責任

—アンドレ・マルロー批判—

本論は、先に日本フランス語フランス文学会編になる *Etudes de Langue et Literature Françaises*, No. 9, 1966. に発表した論文、「André MALRAUX におけるエリート観念」の続きをなすものである。

前論文においては私は、マルローの小説および芸術論を分析することによって、社会学における「エリート理論」の助けをかり、彼の観念がある推移発展の結果エリート観念に到っていることを証明した。本論では、微力ではあるが、彼のエリート観念に私なりの批判を試みる積りである。私は原則としてエリートを肯定する立場である。従って、マルローのエリート観念を十把一からげにして批判し去る暴挙にできる気は毫もない。むしろ、彼のエリート観念において行為にかかるウェイトの大きさには、深い共感を覚える。その点を正当に評価する意味で、本論では、行為の概念を敷衍し頭揚するであろう。しかし同時に、そこに附随すべき責任の観念の不明確さ、不足にはあきたりなきを感じる。従って、彼に対する批判とし

川久保輝興

ては、特に責任の問題をとりあげる。

前論文では、マルローの観念がいかなるところから出発し、どのようにエリート観念に到ったかを論じた。次にその概略を述べる。

マルローの形而上的出発点は、ニヒリズムであった。彼は現実を不条理とみなす。即ち、人間個人の内包する二つの価値の分裂矛盾を意識する。二つの価値とは、一は個人の絶対価値——個人は存在するだけで絶対的肯定となる価値、他は相対的価値——個人の存在は他の存在に対して何らかの意義を有するという価値である。二つの価値の全的実現への要求は、現実の力によって無に帰せしめられる。この不条理の現実に対して要求を貫こうとする反抗的行為を、マルローは冒険と呼ぶ。人間の冒険は偉大ではあるが常に虚無に結びついているというのが、マルローの初期の観念であった。彼は、この人間的行為（反抗）＝虚無（無意味）の恒等式の右項を有効（意味）に換えるべく、一つの新たな観念を提示する。有効性のために彼は人間の連帯を称えるが、それは、支配被支配関係の上にな

り立つ連帯であるとともに、歴史上の創造者から創造者への文化伝承面での繋りでもあった。かかる連帯によって人間は虚無から救われるというのである。そこにマルローの階層性肯定の態度、エリート観念がある。

以上を序文として本題に入る。

一、芸術家、即ち創造エリートはいかなる行為をするか。また、何によって彼らは正当化されるか。

マルローは、芸術家を知的創造エリートとみなし、非芸術家との差異を明確にたてる。彼らは、非芸術家と異なる上で、いかなる行為をするか。それについて、マルローの芸術論 *La Psychologie de l'Art* (改版 *Les Voix du Silence*) によって述べることから始めよう。

マルローは、芸術家の行為とは一つの宇宙 *univers* を創ることであると云う。一つの宇宙とは、作品の外部には存在しないものである。嘗て全ての芸術は主題をもっていた、と彼は云う。そのとき、作品の価値は、その主題を表現する技巧——いかに芸術家は彼の主題を表現したか——と、その主題の内容の豊潤さによって決定されていた。作品の価値は、作品自体よりも、作品の背後に語らたフィクションに支えられていた。しかし、近代芸術の発生とともにフィクションは終りを告げた。即ち主題の消滅である。マルローは、近代芸術の特性は「語らないことだ」という。要するに「絵画を絵画とみなすこと」、いいかえれば芸術作品はそれ自体ということである。従って芸術家の行為とは、それ自体、芸術家の固有な世

界たる作品を創作することに外ならない。

作品を作ることに、即ち宇宙を創ることとは、従って、芸術家が向う存在や事物——オブジェ——から独立したある特殊な「言語」を構成することである。この言語自体がオブジェである限り、換言すれば、この言語がオブジェから独立してないとすれば、芸術はあるものの表象 *representation* である。新しい芸術の求めるものは、マルローによれば、「オブジェと絵画の間の関係の顛覆、即ちオブジェの絵画への従属」である。重要なことは、あるがままの自然のオブジェを忠実に表現することではなく、オブジェを絵画に附加 *annexer* すること、即ち「オブジェの機能を変える」ことである。芸術家は、オブジェの諸要素を自分の好みのままにとりこみ、同化 *elaborer* して、自らの内的秩序に従って作品の上にひろげるのである。マルローはルノワールの例をひく。

「…ある日、ガレージの前に画家のルノワールがやってきた。彼は大きな絵を一枚もっていた。私はちょっとみてみようと思った。それは、どこか別の場所で水を使っている裸婦の絵だった。彼は、何かわからないがじっとみつめていた。彼はただある一角を探していたのだった。」海の青色が《洗濯女》の小川の青色になっていた。ルノワールは自分のタブローを豊潤にするために世界を使ったのだ。

芸術家の行為とは、現実を分解し、その諸要素を同化再構成することによって、現実から切り離された固有の世界を創造する行為、現実を自己に従える行為であるといえよう。

芸術家がオブジェに従属していた時代には、芸術家の意志は変形

transformer すること、即ち自然のオブジェの代りに、変形されたオブジェを置くことであつた。近代芸術とともに芸術家の意志は、同化の意志、変貌 transformer の意志となつた。ゴッホの「椅子」は、オブジェ・椅子を表象 representer してはいない。そこにあるのはゴッホの世界である。オブジェ・椅子はそこでは、ゴッホの世界・椅子に変貌しているのだ。かくて芸術家個人の内的操作が問題となる。嘗て、宗教画は信仰を目的としていたし、女性の絵画は共通の美を目的としていた。諸々の事物の「散らばつたフォルムは信仰や美に収斂」していたのだ。新たにそのフォルムは、「個人の方に収斂」する。あるがままの存在および事物は、全てを意味するが故に、それ自体では無意味である。それらは、芸術家個人との関係においてしか意味をもたない。それ故芸術家は、散らばつたフォルムを同化再構成することによって、即ちそれらのフォルムを有機的な一つのフォルムに仕立て上げることによって、存在、事物に意味をわりふりする。存在、事物はそれ自体では無意味であるから、無の相を帯びている。芸術家が存在、事物に意味を与えることは、従つて存在、事物に生命の息吹きを吹き入れるに等しい。存在、事物はそこで初めて、無の世界から有の世界に導き入れられるのだ。作品としての有機的な一つのフォルムによって有の世界に引き入れられた存在、事物は、芸術作品の永続普遍性と合体して、そこで歴史の上で生命を永らえうるのである。従つて芸術家の行為は、虚無に結びついた現実から、存在、事物の意義、永続性を保証し樹立する行為といえる。あるいはそれは、無意味に貶められている存在、事物の絶対価値を、意味の相対価値に変貌せしめる反抗的行動

と云つてさしつかえあるまい。

ところが、人間個人も現実の世界の中に存在しているのだから、世界の側からみれば、芸術家個人の存在 *being* も世界の諸フォルムの一つに過ぎない。彼の存在 *being* は、それ自体では無意味であり無に等しい。存在が意味を所有しうるのは、存在を一つの有機的なフォルムに仕立て上げる固有な行為の形態、スタイル *style* によつてである。スタイルこそが、存在を意味づけ歴史の中に据え置くものなのであり、芸術そのものなのである。マルローは、「スタイルは意味である」と云う。それ故、「いかなるスタイルも、世界を人間の本質的部分の方にふり向けるようにする世界の諸要素を組み合せることによつて、固有な宇宙を創造する」のである。芸術家の行為とは、自己の固有の行為の形態たるスタイルをフォルムとして作品に定着すること、従つて自己のスタイルへの不断の努力に外ならない。

以上がマルローの説くところから抽出しうる芸術家の行為の性格であるが、非芸術家との本質的差異を併せきくとき、それが一種の芸術至上主義ともきこえるエリートの行為であることが一層判然する。マルローは、かかるエリートの行為を何によつて正当化しているのであるか。

マルローは芸術家の行為の責任を云う。非芸術家といえどもカンパスに向い、楽器を奏し、詩をつくる。しかし彼らの作品は芸術ではない、と彼は云う。彼は例を児童画について挙げるのだ。

子供の芸術家に対するは、夢のうちに街を征服したキムの子
ムールに対すると同じである。目覚めたときに帝国は消え去つ

た。さて、芸術は夢ではない。夢の所有である。それ故、子供は現実の抵抗に遭遇したとき、彼の表現は無責任とともに消える。

芸術は責任の上に築かれるものであり、責任とは、一つの宇宙、一つのスタイルを、現実に向向かって営々として創り上げる努力だと云うのである。あるいは、芸術家は冒険家なりというマルローの定義からすれば、責任とは、反抗的行為達成への精進と云えよう。かかる責任に基づいて芸術家のエリート的行為はその正当性を得られるとするのだ。

この責任の対象は何か。何に対する責任であろうか。責任が問題のとき、何に対するが問われねばならない。「責任をとった以上、きみは勝利者とならねばならない」と、『希望』においてガルシアは云う。責任即ち勝利者たることは、反抗的行為を虚無に終らせないこと、存在の意味樹立の証左を提示すること、実際の作品を生むことに外ならない。反抗は有効性を担わねばならず、意味をもった有機的なフォルムによって表わされねばならない。このフォルムがなければ、無責任が反抗の名を篡奪する。芸術家は勝利者とならねばならぬ。自らの反抗の意志、虚無から人間を解放せんとする決意をフォルムに変える努力がなされねばならない。芸術家の責任とは、従って彼自身の行為実現を意味する責任、即ち芸術家の芸術家自身の行為に対する責任である。

二、エリートはその行為のみによって正当化されるか。また責任はどうあるべきか。

芸術家は誰しも、出生以来芸術的（創造エリートの）行為をするわけではむろんない。生涯のある瞬間、ある行為をして以来芸術家となるのだ。画家は画家としての作品を制作して以来、音楽家は音楽家としての曲を創作して以来である。その時に前に彼らをエリートとは現実には呼び得ない。従ってそこに、かくかくの人間はエリートたるの条件を備えるが故にエリートとなつて然るべく、しかしかの人間はその条件を備えないが故に然るべからずの判断と承認は、どこに立てられうるかという問題が生じる。エリートになりうるなり得ないの別れ目の問題である。エリートになりうる条件といつてもよい。それは次の三条であろう。

一、優秀性（才能、能力等天賦の資質において秀でているかどうかの問題。）

二、実践行為（エリート・グループ参加の行為を實踐するか否かの問題。）

三、外的条件（財力をもつか、出生、門地はどのようなものかなどの社会的条件の外、諸々の個人の身辺的状況等個人に固有な外的諸条件が備わっているかどうかの問題。）

マルローは、芸術家は生れながらに芸術家であるという。従ってエリートは生れながらにエリートということになる。それは優秀性、即ち才能や能力の問題に外ならない。他に優れた特殊な能力をもつが故に、この人間は生れながらにエリートの資格をもつ。

確かに優秀性はエリートへの必須な条件である。然し、それは条

件の一つでしかない。優秀であれば誰しもエリートあるいは芸術家だというわけにはいかぬ。素質あるいは可能性は、即実際ではない。才能を備えた者を眞の芸術家にするものは、その若き日に芸術家たることを志したとき、その後の生涯を芸術世界に賭けるか否かの選択を前にして、断固賭けることを決意し実践した最初の芸術的行為である筈だ。マルローはその行為を *« l'acte »* にみる。(従つて、この最初の行為を今、選択的行為と呼ぼう。) 芸術世界に参加することによつて、芸術家は必然的に第二の行為、作品の創造にうつる。創造の実践は、彼が最初の行為以前に将来実現せんと目論んだ価値を実際にもたらす。(従つて、この第二の行為を価値発現の行為と呼ぼう。) 芸術家は、最初に目論まれ後に実現されるこの価値——非芸術家にあつては実現しない価値の故に、自らの特性を要求しうる。彼はエリートたることの証左をうるのである。そのためにも、最初の芸術世界参加の行為実践が必須であつた。その故に、芸術家が芸術家たりうるのは、いいかえればエリートがエリートたりうるのは、その最初の選択的行為の実践によつてであるといえよう。

しかしここに問題が生起する。今 A、B をそれぞれある人物とする。両者とも芸術家たることを志し、各自のうちに才能を感じているとしよう。一体何によつて、人物 A がより多く芸術家への正当性を帯びていると決定できるのか。この判断の客観的基準は何か。それぞれ所有している天賦の才によつては判定できない。何故なら、各自が自分により多く才能を賦与されているといつても客観性は何もないからだ。要するに、最初の選択的行為以前においては、

A の B に対する優越性の証左は何も得られないのである。判定の基準は、実際に第一および第二の行為が行なわれ、目前にそれぞれの価値が実現された後、即ち価値発現の行為が遂行された後でなければたてられないのである。然るに我々は今、最初の選択的行為が実践される以前において、A はこれこれの根拠によつてエリートとなつて然るべく、B は然るべからずの判断をたて承認しなければならぬ場合に立ち合つていたのである。その点について述べるには、まず価値の概念を闡明することから始めねばならない。

価値には二種類ある。その一は、あるもの *« objet »* はあることとそれ自体で一つの価値である価値、現在ここに個物としての価値、他との関係によつてなりたつのではない絶対価値である。その二は、実際のところは現在価値が発現されていないのだから価値ありとし得ない筈であるにもかかわらず、未来のあるときの確実な発現を予測して現在すであるとする価値、先取り価値、他との比較の上になりたつ相対価値である。一冊の本は、その本としてそこにある、それだけで一つの価値をもつ。読まれるものとしての価値ではなく、その本個物としての価値である。読まれるものとしての本は、読まれるものとしてしか価値をもたないが、個物としての本は、如何なる使用に供せられようともし価値をもつ。一定の用途が価値ではなく、現在そこにあることが価値なのである。従つてその本は、現在そこにありさえすれば、所有者の気まぐれによつてどのように用いられてもかまわないのだ。使用価値の概念はこの価値概念の上になりたつ。この価値は云わば内在価値である。他方、読まれるものとしての本は読まれなければ価値がない。読まれることが個

値である。しかし現実には、読まれたあるいは読まれているのではなくとも価値を賦与する。今そこに閉じてある本は、現在読まれていないのだから、実際にはその価値は発現されていない。しかし当然それは読まれるとして現在価値ありとする。未来の価値を先取りするのだ。あるいはまたこうも云える。本は商品としては、実際に交換したときでないと価値が発現されたとは云えないのに、未来の確実な交換を予測して、現在他の商品との比較のもとに価値をもつとする。従ってこの価値は、他との相関においてなりたつ価値、相対価値である。

この二つの価値の概念を人間に適應することによって、とりわけ相対価値、先取り価値を適應することによって、先の設問に答えることができる。

今、A、Bともに最初の選択（芸術世界に参加するか否か）を前にして、Aは参加の行為を実践し、Bはしないと仮定しよう。Aはこの行為を実践した。従って彼は必然的に、その後にくるところの、最初の行為が規定する行為、価値発現の行為をすることになる。つまり、最初の選択的行為にはすでに価値発現の行為が纏いついており、ちょうど糸の一端を外方に繰り延ばしている糸玉のように、選択的行為は価値発現の行為の先端を未来の方に繰り延ばしてあるのである。Aは不可避免的に芸術作品の創造に向う。作品は目論まれた価値を生む。この価値は芸術作品としての価値、即ち他との関係の上になりたつ価値、相対価値である。他方、Bは最初の行為を実践しなかった。それ故価値発現の行為は、彼には関与しない。Bは目論まれた価値を生まない。彼はこの価値発現の道程にはもと

もと登場しないのだ。ところで、相対価値は、未来の交換を予測して商品に価値を与える如く、先取りされる価値である。従って、Aが生む目論まれた価値は、実際に生む行為をする以前、即ち最初の選択的行為以前において、予めとりこみうるのである。未来を予め積分することによって、云いかえればAの相対価値を想定することによって、AはBより多くの価値を現在もっていると言いうるのだ。

ここにおいて重要なことは、最初の選択的行為を実践するか否かである。彼は実際に行なうであろうか。行なわないであろうか。もし行なえば価値を実現する。もし行なわれないなら実現しない。最初の行為以前と最初の行為の間の距離と、最初の行為と価値発現の行為の間の距離とは、前者の方により大きい跳躍巾がある。何故なら、最初の行為はその後の行為を規定するのに対し、最初の行為以前は最初の行為を規定しないからである。最初の行為を開始すれば必然的にその後の行為に向かうのであるから、最初の行為を実践しさえすれば初めの目論みに到達しうる筈だ。従って、最初の行為の有無がAをBから隔てる。Aが最初の行為を意志したとき、彼はまだ実際に行為はしていないのだが、彼が行為するということはすでに事実なのである。Aは、最初の行為を意志をもって実践するという、事実に基づき、Bより多くの価値を保持する。それ故彼は、芸術世界参加の承認が得られる。特権的行為への認可が与えられるのである。他方Bは、最初の行為を実践しないという、事実に基づいて、認可を与えられないのである。可能か不可能かの問題ではない。行為ができるかできないかの問題ではない。やるかやらないかの問題で

ある。Aは最初の行為を、出来るからするのではなく、するからするのである。彼はBが生まれない価値を生む。Bは、出来ないからしないのではなく、しないからしない。未来を予めとり入れることにより、Aは実際に行為すると云いされるから、即ち最初の選択に賭けると云いされるから、目論まれた価値（相対価値）を実現し、Bは実際に行為をしないと云いされるから、価値を表現しないと云いうる。Aは特権的領域へ参加するための価値を、現在より多くもっているのだ。その故に、彼はエリートたるの正当性を帯びている。

Aは、エリートたるためには、最初の芸術的行為（参加の行為）、ついで芸術的精進の行為（創作）を遂行しなければならぬのである。マルローは、すでにみた如く、芸術家の責任として、かかる行為の実践を強調している。

しかし、エリートたるには第三の条件がある。個人に固有な外的条件（状況）である。それが実践行為を可能にも不可能にもする。これこれの外的条件の故に、彼はしようと思ってもできないのだ。従って状況の問題とは、出来る出来ないの問題である。次にその問題にうつらう。

出来る出来ないの問題は、先取りされた価値に関わらない。何故なら、先取りされた価値とは、後に発現される筈の価値を今発現されてしまったとした価値なのだから、出来る出来ないはもともと問題にならない。それは内在価値（絶対価値）に関わる。内在価値とは絶対的肯定である。存在に本質的に内在する価値は、他によって傷つけられない価値である。ということとは、個物はそれ自体で全てである、何であつてもよいという意識である。いわば人間の使用價

値である。一冊の本は必ずしも読まれることを目的としない。棚に飾れば装飾品となりうる。本自体の内在価値は無限の用途である。人間の内在価値は、可能性の全体といえる。個人の内部は可能性の凝縮なのである。一人の人間は、しかじかであつてもよく、かくかくであつてもよい。事実彼は、自分はいかじかでもあり、かくかくでもあると意識する。音楽家の才能をもち、画家の天分を備え、小説家の感性を賦与され、学者の素質をもち、政治家の手腕があると感じる。しかし現実には彼は政治家となる。それが彼に対する外部からの定義であり、彼の意味である。何故なら彼は、芸術的才能もあつたが政治家として行為したからである。彼はしかじかであつてかくかくではなくなつたのだ。それは、外部の条件が、可能性の一つ一つが内から外へ発露するのを消し去つたことに外ならない。

外的条件の振動と可能性の振動とが干渉し合つたのである。外的条件は内在価値を消去しようという性格をつ。ただ数少い可能性だけが、外的条件との共通の振動数によって共振し外部へ顕現する。外的条件と内在価値は、常に干渉、共振の關係といえる。それ故、可能不可能の問題は、專一的に個人の内在価値に関わつてるのである。

右の議論から次の結果が生起する。AはBに対して責任をもたなければならぬということだ。AはBの内在価値を肩代りしなければならぬのである。各人は、自己の内在価値を絶対的肯定としてゐる。無意味に切り下げられることを肯しえない。マルロー自身の形而上的出發もまさにこの価値の絶対肯定の上にあつた。Bは芸術家たらんと欲した。即ちそのままでは無意味である自己の内在価値

を、意味づけ作用たる創造行為によって、相対価値に変貌させようとした。しかし、Bの身辺にのしかかる外的条件の故に、彼の意図は挫折するのだ。Bは能力もあり意図もあったが、彼の最初の芸術的行為は実践できなかったのである。Bが、彼の内在価値を発現できないとすれば、その価値はどうなるか。Bは、非創造エリートとして、特権的領域から疎外され、虚無に投げ出される。Aは、Bに代ってBの価値を自らのうちに発現しなければならぬのだ。AはBの無言の要請、虚無からの解放の要請に答えねばならない。AはBに対して責任をもたねばならないのである。

責任とは、語源的意味においても、何ものかに答える *répondre* するものでなければならぬ。その何ものかは、自者であってはならず、他者でなければならぬ筈だ。エリートは非エリートに答えねばならない。マルローにかかる意味の責任観念が不足していることは、彼が、できるできないの問題、即ち個人に特殊な状況の問題を無視したこと、そしてその故に、状況が専一的に関わる個人の内在価値を、当初の冒険的意志にもかかわらず忘れ去ってしまったことに由来する。非エリート個人の内在価値の無視が、視点をエリートのみに限ってしまったのだ。